

西郷信綱

古典の影

批評と学問の切点

未来社刊

西郷信綱

古典の影

批評と学問の切点

未来社刊

影の古典

一九七九年六月一日 第一刷発行  
一九八〇年二月十五日 第二刷発行

定価 一五〇〇円

◎ 著者 西郷信綱

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三ノ七  
電話・代表(八二四)五五二一  
振替・東京七七八三三八五

精興社印刷 今泉誠文社製本

# 古典の影

目次

——批評と学問の切点——

古典の影……………七

学問のあり方についての反省……………二五

文学史の非完結性……………三三

批評と文学史……………四九

——アカデミズムへの疑問

《読む》という行為……………二五

物に行く道……………三七

——宣長のこと

古典としての『吉野の鮎』……………二五

詩人と歴史家と……………一六七

——風巻景次郎『西行と兼好』

万葉集と歎異抄とをむすぶ……………一八三

——吉野秀雄追悼

学問の散文……………一九

断章……………一七

人類学のこと(書評)……………一七

正徹について……………二〇六

古典の物化……………二一〇

歿後の門人ということ……………二二四

縦系と横系……………二二九

宣長を読み直す……………三三四

散文について……………三三八

詩人の命……………三三二

草稿から版下まで……………三三六

国語教師……………三三八

学界偶感……………三四一

初出一覧……………三四八



# 古典の影

——批評と学問の切点





## 古典の影

### 7 古典の影

伊藤仁齋『童子問』の一節にいう。「一にして方にゆく、これを博学といふ。万にして又万、これを多学といふ。博学は猶<sup>なほ</sup>、根あるの樹、根よりして而して幹、而して枝、而して葉、而して花実、繁茂稠密、算<sup>かぞ</sup>へ数ふべからずと雖も、然れども一氣流注して、底<sup>いた</sup>らずといふ所なく、いよいよ長じて、いよいよやまざるがごとし」。これにたいし「多学」は布でつくった造花で、らんまんと咲きみだれ人の目をよろこばせはするが、しよせん死物にすぎず、成長するということがない。両者は一にすべきでなく、「駁<sup>はくざつ</sup>雑の学を以て博学とするは誤れり」と。(訓みは古典文学大系『近世思想家文集』による)

古典が偉大なのは、たんにそこでいわれていることじたいによってではなく、そこでいわれようとしていること、すなわちそれが私たちに投げかける志向性の影によってである。文学史とか思想史とかよばれる学問が、おおむね無味乾燥で、現代とひびきあうことがまれないのは、

古典にいつてあることをたんなる歴史的事実として対象化し、それが私たちに投げかけてくるこの影をうけとめようとしなからである。右の仁齋のことばにしても、一古学派儒者の言として、当時の儒学史の系譜や枠組のなかでたんに事実に読むなら、せいぜい朱子学批判の一節にすぎず、おそらく引用にも値しないだろう。しかし、このことばで仁齋が何をいわんとしているか、つまりこのことばの背後に、目に見えぬ、仁齋のいかなる種類の、いかなる量の経験がよこたわっており、それがここにいかに表現されているかという点を読みとろうとするならば、それは私たちの精神を強く照射することばとして、とみにそのことばをひろげてくる。たとえば次のような一連のことばを、右の仁齋のことばは私の心によび起す。

今日の論壇で活躍している八宗兼学を自任する士の多くは、「一にして万にゆく」ところの「博学」の士ではなく、実は「万にして又万」なる「多学」の徒に外ならないのではあるまいか。あるいは、ジャーナリズムという世界は、右にいわゆる「多学」という名のさまざまな造花が咲き競い、ニセガネのひびきで衆人をあざむく市場のごときものではないか。いや、論壇とかジャーナリズムとかにかぎらず、私たちじしんの今日の学問にしても、しっかりと大地に根を張っているのではなく、したがって、根よりして幹、そして枝、そして葉、そして花実へと茂り成長してゆく見こみを大してもってない「駁雑の学」という泥沼におちこんでいるの

ではなからうか。今の日本において、学問的成熟がひどく困難であり、私たちの学問が結局、若いときにやった仕事の因襲的なくりかえし、その解体または水ましといった尻つぼみの状態に終り、「一」にしてついに「一」にすぎぬような形になりがちなもの、「一にして万」に至るその「一」なるものの根源的定立に欠ける点があるからではなからうか。少なくとも現代の私たちの学問はおしなべて、どこかで決定的に故障しており、しかもそのことがほとんど反省されずにきているため、この故障はいっそう無気味なぐあいには深まり、かつひろがって行こうとしているのではあるまいか、と。

右の仁斎の一文を読むと、私は否応なくこのようなことを考えさせられる。これは仁斎からの逸脱でもなければ、いわゆる深読みでもないと思う。その志向性において読むとき、右の一文の行間の沈黙から、まさにこのような意味が発してくるのである。いま立入ることはしないけれど、行間を読むという古来の読書法には、言語表現の本質からしても首肯される点があるはずで、とにかく、この行間の沈黙から発してくるもの、これが私たちに投げかけられた古典の影であり、古典がつねに読み直され、そこに人があらたな意味を見出すのも、この影においてである。だから、そこに表現されている観念の姿そのものが問題であるだけでなく、それが私たちに放射してくる意味、それによって私たちをあらたな探究に向って開くところの意味、

すなわち古典のヴェクトルとでもいうべきものが同時に問題なのである。『童子問』が日本における学問論のもっとも重要な、だがかくされた古典であると私に思えるのも、この点にかかっている。以上は一節をとり出して云々したにすぎないけれども、同じような志向がこの本の全体をつらぬいていることは、次に引用する若干の章句によっても明らかである。

人の外に道無く、道の外に人無し。……故に道を知る者は、必ずこれを近きに求む。その道を以て高しとし、遠しとし、企て及ぶべからずとする者は、皆道の本然にあらず、みづから惑ふの致す所なり。

卑ひくきときは則ちおのづから実なり。高きときは則ち必ず虚なり。故に学問は卑近を厭ふこと無し。卑近ひんがせを忽ゆるがせにする者は、道を識る者にあらず。道はそれ大地の如きか。天下、地より卑きはなし。然ども人の踏む所、地にあらずといふことなし。地を離れて能く立つことなし。況や華嶽を載せて重しとせず、河海を振おこめて洩らさず、万物載おするときは、則ちあた豈その卑きに居るを以て之を賤いやんずべけんや。

書を読んで識見なきは、猶読まざるがごとし。いやしくも識見を得んと要せば、まさにその帰宿する所を尋ぬべし。徒に涉獵すること勿れ。すべからく外に在る者の家に帰ることを求むるが如くすべし。迷子の道路を行くが如くすべからず。

推敲に一生をかけたというだけあって、緊張しているとともに堅牢で、おしゃべりのない、また一点の私心を感じさせぬ、それでいてゆたかな意味と影を放つ文章である。比喩にたよりすぎていくというかも知れぬ。が、それはそうではなく、経験と学問との比喩的にしかいいとれない相関関係の深所に参入しているわけで、私はむしろその比喩の秘めているアンビギュイティにひかれる。仁齋が心を勞してたたかっている地点を、逆に私たちは、ある種の論理的自明性や言語的なおしゃべりでもってやりすごしてはいないか。いかにも彼は古義学派と称される学派の創始者であり、『童子問』はこういう立場から、窮理を事とし虚静に耽る宋儒理性の学の越権に対抗して、人心に根ざし風俗に徹した人倫日常の学こそ論孟の古義にかなうゆえんであることを説いたもので、以上に引用したところもすべてこうした文脈のなかでいわれたものである。この時代的文脈は、『童子問』の本質を理解するのに、いうまでもなく不可欠である。だが、当の相手であった朱子学（宋学）が滅び、また仁齋の信じていた孔孟の学そのものがす

たれてしまつても、『童子問』が、江戸の思想史とか儒学史とかを組みたてるための歴史的素材にとどまらず、なお今日、私たちの精神を照らす力をもつた学問論としてよみがえつて来ることができるのはなぜであるか。それは、時間にうちかつ一つの新しい綜合、真理と呼ぶほかないような一つの綜合が、この著作においてなしとげられているからで、そしてそれは、下学、上達という弁証法のたまものであつたと思う。仁斎いう、「下学は猶、平地上に在て行くがごとし。循循としてやまざるときは、則ち能く万里の遠きに到る。……向上の一路を求むる者は、猶平地を去て、空中に上騰せんと欲するがごとし。墜て傷損せざる者は、未だこれ有らず」と。この万里の遠きに到つた姿を、私は一つの新しい綜合、または真理と呼ぶ。

世阿弥のことばは、能芸を論じて能芸をこえ、芭蕉のことばは俳諧を論じて俳諧をこえている。仁斎のことばもまた、孔孟の学を論じてそれをこえるものといつてよからう。これは彼の学問が、みずからいうとおり、大地に根をおろし、根より幹、そして枝、そして花実へと茂り成長していつているしるしである。だがさきによつたように、そこに結実している觀念の形姿の見事さを眺めるだけでは充分でない。大事なのは、そのいわゆる下学上達をさらに徹底化し、いっそう下学にして上達しようとするならば、仁斎の思想体系は外ならぬ仁斎じしんの志向性によつて内部から爆破され、孔孟の学という枠組もどこやらに吹きとんでしまふであらうとい

うこと、そのような影を『童子問』じしんが私たちに投げかけているという点である。いいかえれば、仁齋が孔孟の学にとどまらざるをえなかったのは、儒教という時代通念の枠にしばらく、その下学上達を学問の方法として徹底化することができず、方法的自覚となるべきものを倫理的心得の次元に終らせていることに關係する。

それにしても仁齋の志向が儒教の枠をこえ、未来を先取していることは疑えない。「下学而  
上達」という論語の有名なことばは、「下学<sub>三</sub>人事、上知<sub>三</sub>天命」と古くから注されているが、彼は学問における経験と認識の問題としてこの古言にあらたな意味付与をおこなおうとしていると見ていい。このように彼が先取しているものを過去から現代に拉し来らねばならない。

彼の文章には、「大地」とか「根」とか「花実」とかいう語がよく使われている。で、うっかり読むと、いわゆる土着主義を説いているかのような印象を受ける。しかし、彼は決して「一」にしてついに「一」に終る土着を説いているのではなく、「一」にして万にゆく、そういう「一」の根源的定立の必要を一貫して説いているのである。だから、そこには弁証法が、経験と認識との、基礎づけるものと基礎づけられるものとの弁証法がある。下学上達は、たんに下学でないとともに、たんに上達でもなく、下学によって基礎づけられた上達なのである。で



は、下学であることにおいてなぜ上達という超越が可能なのか。それは、一步一步が万里の遠きに至る過程、つまり、「一」と「万」とのあいだには、目に見えぬ飛躍と断絶の契機がはらまれているからでなければならぬ。

もっとも仁斎は、この飛躍と断絶の過程については、ほとんどふれていない。ただ次のように述べているのが注目される。「学はその正しからんことを欲し、功は其の熟せんことを欲す。奇特を好むべからず、捷徑を求むべからず。水到れば船浮び、華謝すれば子結ぶ。……苗よりして秀で実のる、おのづから其の時あり。其のおのづから悟るに任せて、我より悟を求むること勿れ」と。この「おのづから」云々のことは重大である。弁証法が真に弁証法的であるためには、結論が過程のなかに予想としてふくまれていてはならない。真理は客観的に物として外にあるのではなく、「循環として」歩くことにおいてなるのだからだ。「我より悟を求むること」がいけないのも、それによって悟りつまり真理が、外にすでにあるものとして対象化され、その予想された結論が過程を心的に空無化するからで、彼が批判しようとした朱子学の「理」とか、禅家の「頓悟」とかは、まさに、そのようなものであった。

とくに禅家を批判して、「禅家は空言を以て空理を説く。耳聞く所なく、目見る所なし」といっているのに注目したい。朱子学にしてもそうで、「声もなく臭もなきの妙を以て、無極の